

## 混住化地域における新住民の社会関係と地域資源管理への参加傾向

### The Newcomers in Suburban Villages: Social Relationships to Established Inhabitants and Tendency to Participate in Management of Regional Resources

本田 恭子（京都大学大学院農学研究科 博士後期課程）

#### 【ねらいと目的】

農地や農業用水路、ため池に代表される地域資源は農業生産に不可欠な基盤であると同時に重要な公益的機能も持つ。近年、村落で地域資源、特に農業用水路の適切な管理を続けることが困難になりつつあることから、これまで資源管理に積極的に係わってこなかった非農家に協力を求めることが必要であるとの認識が高まり、資源管理への非農家の参加を促す施策が実施されている。混住化の進む地域では新住民の村落での社会関係が十分築かれないうえに、新住民が村落社会への参加に消極性になることや、新住民と旧住民の対立により村落の運営に支障が生じることが問題とされてきた。村落での社会関係の一側面である資源管理への参加に新住民が積極的になることで、これらの問題の解決につながる可能性がある。一方、地域資源の管理行為を続けることが当該資源の人々への帰属根拠となると考える生活環境主義の視点に立つと、非農家や新住民が資源管理への関与を深めることは、当該資源への彼らの権利を認めることにつながり、村落の運営に大きな影響を及ぼす可能性もある。このように非農家に資源管理への積極的な参加を促すことは、単に資源管理に不足する労働力を補うだけにとどまらない可能性を持つ。しかし、先行研究では資源管理への非農家の協力条件の解明が焦点となっていた。そのため、非農家が村落内の資源管理にどの程度関与しているのか、そしてどの程度まで関与し得るのかについてはこれまで明らかにされてこなかった。

そこで本研究では、代表的な地域資源である農業用水路の管理作業における住民の作業内容から、作業の割り当てに見られる原則を導出する。そこから、地域資源管理への非農家や新住民の参加可能性について検討する。

#### 【活動の記録】

調査年月日 2009年8月25日～26日、9月4日、9月8日～9日

調査者 本田恭子

調査地 兵庫県福崎町

調査目的 都市近郊農村の公共圏の現状についての集落代表者へ聞き取りを行う

なお、2009年11月に開催された第57回日本村落研究学会大会にて調査結果をまとめて報告した。

### 【成果の概要】

上記の課題に対して、混住化の進んでいる都市近郊農村である兵庫県福崎町で 25 集落の代表者に聞き取り調査を行い、農業用水路の管理作業において住民に割り当てられている作業内容とその作業内容が割り当てられる根拠を調べた。

その結果、農業用水路やため池の管理作業では「新住民／旧住民の区別」、「水田所有／非所有の区別」、「近接性」、「水田耕作／非耕作の区別」、「手段の所有／非所有の区別」、「一体性の保持」の 6 つの原則のいずれかないし複数を組み合わせて作業場所を割り当てていた。このうち「新住民／旧住民の区別」と「水田所有／非所有の区別」、「近接性」、「水田耕作／非耕作の区別」の 4 つは属性に応じて作業場所が割り当てられることから、これらの原則の下では農業用水路の管理への非農家（新住民）の参加可能性はかなり限定される。しかし「手段の所有／非所有の区別」の原則は参加者の能力に応じたものであるため、非農家や新住民もより積極的に参加することが可能である。さらに「一体性の保持」の原則には、非農家や新住民も含めた住民全体に対して、農業用水路の管理への関与の度合いを維持してもらおうという方針の存在が伺える。

